

魅力的な学術誌



塚 原 聡

私は、現在、日本分析化学会の英文誌であり、分析科学の総合論文誌である Analytical Sciences の編集理事を拝命しております。昨年度から2年間の任期であり、現在1年強が過ぎたところです。編集理事の仕事は、多岐にわたっており、神経を使うことも多く、また多忙でもありますが、学術論文誌の編集に深く関わったことで多くの貴重な経験を得ています。ここでは、編集理事の仕事を通して学術誌について感じていることを記してみたいと思います。

ところで、私の人生初の論文は、1987年の Analytical Sciences (3巻) であり、そこから研究者人生が始まったといっても過言ではありません。そう考えると、Analytical Sciences には不思議な縁があります。あれから27年経って、本年である2014年は、Analytical Sciences の発刊30周年に当たる年です。本年1月号は、これを記念して23編の Special review を集めた30周年特集号を発刊しました。ご覧になった会員の皆様も数多くいらっしゃると思います。

編集理事の重要な仕事の一つに、ほぼ毎日投稿される論文すべてに目を通すことが挙げられます。これによって、世の中には非常に多くの分析法が存在しているという事実を再認識します。特に多いのは、液体クロマトグラフィーや電気化学分析法に関するものですが、その他にも、新しい滴定法に関するものなど驚くような論文が届くことがあります。また、このような多くの論文に目を通すと、自分自身が取り扱っている分析法は、いかに狭い範囲に限定されているかが判ります。

編集理事の別な仕事として、編集委員長である鈴木孝治先生や編集委員とともに魅力的な学術誌を作っていくことが挙げられます。では、魅力的な学術誌とはどのようなものでしょうか。それは、例えば、新しく見いだされた興味深い現象について、先鋭的かつ多角的に研究している論文を多く掲載している雑誌だと思われます。そういう論文は、多くの研究者が先を争って読むでしょうし、引用される回数も増えることでしょう。またそれらによって、学術誌のいわゆる Impact factor も大きく上昇することになります。

一方、私は、大学の理学研究科に所属している一人の研究者ですが、その立場から学術誌の魅力を考えて場合は、上記のような編集理事の考えとは少々異なっていることに気づきます。理学研究科に所属している研究者は、応用研究よりも基礎研究に重きを置くことが強く求められます。そのため、他の研究者が発見して精力的に研究している主題は、自分の研究対象になることがほとんどありません。

では、基礎研究に主眼をおいている研究者にとって、魅力的な学術誌とはどのようなものでしょうか。普遍的なことを記すことは難しいですが、私は多くのインスピレーションが得られる学術誌だと思っています。例えば、全く異なる研究分野の論文であっても、その実験結果の豊富さや重厚さ、論理性の高さなどに感動することがあります。さらにその中から、自分の研究にも適用できそうな概念を直感的に発見することがあります。

分析化学は、極めて広範な分野を包括しています。そして、各研究者はその分野の一部を担っていることになりませんが、各分野において斬新で質の高い論文を掲載することができれば、その分野の研究者にとって魅力的な学術誌になりますし、その分野外の研究者にとっても多くのインスピレーションを与える魅力的な学術誌になることでしょう。分析化学は Methodology であるという基本に立ち返り、Analytical Sciences には、陳腐な方法を新しい試料に応用したというような論文をそろえるのではなく、新しく有益な方法を提案している論文を多くそろえることを目指したいと思っています。

日本分析化学会の会員の皆様におかれましては、最新の独創性の高い研究成果の一端を Analytical Sciences にぜひともご投稿下さい。本学会の学術誌を皆様の手で育てていこうではありませんか。

[Satoshi TSUKAHARA, 大阪大学大学院理学研究科, 「Analytical Sciences」編集理事]